世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

The Lecture on Environmental Risk that Influence Risk Perception associated with Musashino University Closure/Self-Restraint request in 2020

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-03-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 真名垣, 聡
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1474

環境リスク講義が2020年の大学への登校自粛に関連するリスク認知に与える影響

The Lecture on Environmental Risk that Influence Risk Perception associated with Musashino University Closure/Self-Restraint request in 2020

真　名　垣　　聡*
MANAGAKI Satoshi

はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は世界的な広がりをみせ、2020年2月1日にわが国の指定感染症に、そして翌月11日には、World Health Organizationによってパンデミック（世界的な大流行）とされた。これに伴い、国民に対しては、1. 密閉空間、2. 密集場所、3. 密接場面という3つの密を避けるよう注意喚起が行われ、その後の緊急事態宣言の発令を受けて、4月7日～5月6日の1カ月間、外出自粛を強く要請された。

このような、新型コロナウイルスの感染拡大とそれに伴う自粛は大学にも大きな影響を与えた。初期にはCOVID-19の感染拡大防止策として、2020年3月から全国での休校措置がなされ、多くの大学が卒業式や入学式等のセレモニーを取りやめた。その後、授業の開始を遅らせたり、対面授業を見送りオンライン授業に切り替えることを余儀なくされ、6月に至るまで外出自粛および学校の休校が継続した。

このような中で、大学に通うことを想定していた学生の学生生活にも学業、経済、健康など多岐に渡り変化が生じたことが想定されている。例えば高等教育無償化プロジェクトFREEが行った調査によると[1)]、アルバイト収入が減少、もしくは0になった学生が6割、2割の学生が退学を検討しているとの報告があり、学生の経済的な影響が大きいことが示唆されている。また、外出や人との接触を控える対策が長期化すると、閉じこもりや人との交流が減ることによる弊害も懸念される。さらに人的な交流に加えこの間、日常生活における移動や運動が著しく制限されていたことが考えられ、身体活動量が著しく低下していることも予想された。そのため、体力の低下だけでなく、心身の健康に影響が出る可能性が示唆されている。実際に、秋田大学の調査結果では、1割以上（計288人）に中等度以上のうつ症状がみられたことが報告されている[2)]。

当時の入学前後の学生は、今回の関連する出来事ではどのような、どの程度のリスクを予測し、またそれに基づき行動できていたのだろうか。COVID-19の感染症リスクに加え、日本中の誰もが経験したことのないような緊急事態に陥ったことによる、企業の倒産や雇用の

* 環境研究所 研究員

受理日：(2020年11月16日)
発行日：(2021年2月26日)

問題に関わる経済的なリスク、さらに医療崩壊のリスクなどは日々見聞きしたため、間接的な問題であったかもしれないが、ある程度リスクを正しく認知しようとした上で、自分達の行動指針に反映していたと考えられる。一方、一部地方でのデマの発生や、電話やインターネット上での中傷が新たな社会問題となるなど、人々の不安心理に与えたインパクトは極めて大きく、実際のリスクより認識されるリスクの方が大きく感じられる「幽霊効果」もあったように思われる。そのため、外出自粛前の通常状態と比較したとき、以前よりも不安感や焦燥感を感じる機会が増えていたと想定される。

このような状況をふまえ、本報告では環境リスクに関する講義の前後で Google form における Web アンケートを用いて調査を行い、実際に本学生の外出自粛生活の状況や、これまでの心境の変化、および生活面についての変化を検討することを目的とした調査をおこなった。

調査

データ収集と質問項目

表 1 に示す質問調査を、武蔵野大学 工学部 環境システム学科 1 年生（70 名）に実施した。質問は全 16 項目についておこない、コロナウイルスに関連する質問として 5 項目を、外出自粛の影響として同じく 7 項目を 5 段階評価で作成した。両質問は授業前におこなった。併せて大学に行けないことで感じるストレスについて授業前に回答を求めた（付表 1）。一方、授業（90 分 × 2 回）前後にコロナウイルス感染症への理解の比較に関して質問をおこなった。有効回答者数は 46 件で、性別は男性 76 %、女性は 24 % であった。アンケート当時の居住地に関しては、首都圏（神奈川県、埼玉県、千葉県、東京都）で 72%（1 人暮らしは 4%）であった。

表 1 質問紙調査の概要

実施期間	授業前 : 2020 年 5 月 15 日 ～ 5 月 22 日 授業後 : 2020 年 5 月 23 日 ～ 5 月 29 日
調査方法	インターネットアンケート (Google form)
実施項目	コロナウイルスへの認識、現状と今後の自身の行動など
回答方法	記名、一部多肢選択方式

授業について

「病原性微生物の環境リスク」というタイトルにて、本講では身近に体感したコロナウイルス（COVID-19）を例に、ヒト健康や社会におよぼす影響（リスク因子）とその評価方法、また解釈の仕方について理解を深めることを目的に、前半は環境リスクに関する説明を、後半は COVID-19 に関してリスク低減は可能か？ というテーマで授業をおこなった。COVID-19 に関してリスク低減は可能か？ というテーマにおいては日本リスク学会の「ウイルス除染ガイダンス」等を参照にした [3)]。

結果と考察

1. 外出自粛に関する影響

アンケート結果を図１に示す。今回の結果では、生活のリズムが崩れた（質問 1)、運動不足になった（質問 2）に対して、強くそう思う、そう思うと回答した学生の割合がそれぞれ全体の 59%、54% と半数以上を占めた。類似した結果が様々な大学から報告されており[4, 5]、4 月 7 日～５月６日の１カ月間における外出自粛が、この時期の大学１年生に対して影響を与えていたことが示唆される。一方、家族との会話時間（質問 4）や読書や勉強の時間の増加（質問 5）に対しては強くそう思う、そう思うと回答した学生の割合はそれぞれ 46%、43% と比較して低い値を示した。オンラインゲームの時間が増えた（質問 3）に対しては同様の割合が 59% と高い割合を示していることから、登校時間、課外活動などの大学生活に関わる時間の使い道として、余暇に費やす時間がそのまま延長されオンラインゲームなどの時間が増えていた可能性がある。ただし、社会の動向を新聞やニュースでチェックするようになった（質問 6）に対しては上記の割合が 65%と高い値を示しており、今回の COVID-19 への関心が高かったことが示唆された。

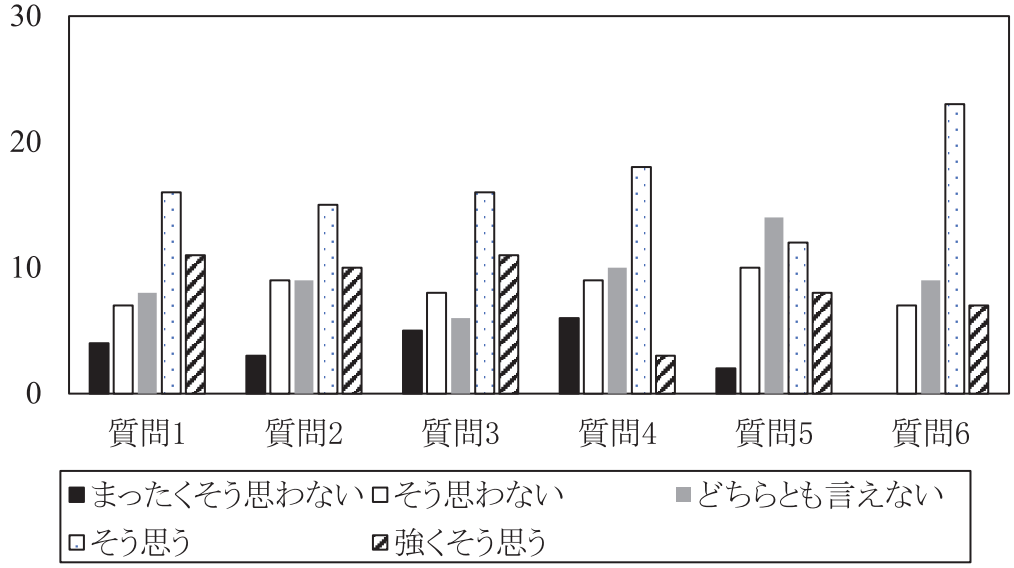

図１ 外出自粛に関連した大学１年生へのアンケート結果

（質問 1; 生活のリズムが崩れた、質問 2 運動不足になった、質問 3 オンラインゲームの時間が増えた、質問 4 家族と会話する時間が増えた、質問 5 読書や勉強の時間が増えた、質問 6 社会の動向を新聞やニュースで良くチェックするようになった）

図2に大学にいけないことで感じるストレスに関するアンケート結果を示す。「生活にメリハリがない」が全体の30%で最も多く、次いで「大学で講義が受けられない」（19%）、「新しい友人ができない」（17%）、「サークルやアルバイトなどの課外活動ができない」（15%）となった。アンケートをした時点（5月）では既にオンラインで講義や学科での顔合わせ行事等が大学で始まっていたため、当時はそれらと直接関連する項目より、授業を自宅でオンラインで複数受けるなど、生活の変化に関して負荷がかかっていたと考えられた。外出自粛による生活リズムの変化は他の大学でも報告されており[5)]、平日の寝る時間、起きる時間が遅くなり、生活リズムが夜型化したことが報告されている。環境システム学科ではこの時期、アドバイザー制度を活用し、大学1年生と電話やEmailで連絡をとり経済、学業、健康面で様々な状況の把握に努めていた。秋田大学の調査結果では、1割以上（計288人）に中等度以上のうつ症状がみられたことからこのような状況下における学生の行動については今後も様々な観点でフォローしていく必要があると考えられる。

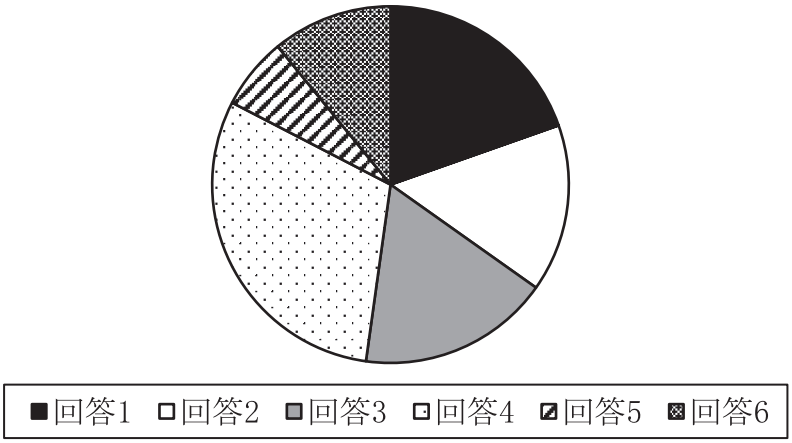

図2 大学にいけないことで感じるストレスに関するアンケート結果

（回答1 大学の講義を教室で受けられない、回答2 サークルやアルバイトなどの課外活動ができない、回答3 新しい友人ができない、回答4 生活にめりはりがない、回答5 家にいて健康が維持できない、回答6 特にない）

一方で、どのくらい自粛期間を延長することが可能かというアンケート（図3）に関しては2か月や半年といった項目が全体の65%以上を占めていた。生活のリズムが崩れ、メリハリがないことに負荷を感じてはいるものの首都圏の状況を把握しオンライン授業や大学生活に2020年5月時点ではもう少し長い期間受け入れる土壌が存在していた、あるいはやむを得ないと考えていた可能性がある

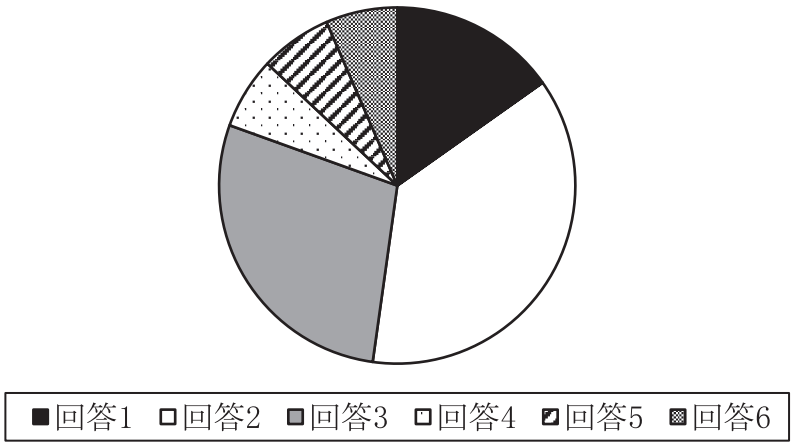

図３「どのくらい自粛期間を延長することが可能か」アンケート結果
（回答１１ヵ月、回答２２か月、回答３半年、回答４１週間、回答５継続できない、回答６終息するまで）

2.　コロナウイルスに関する認識

図４にCOVID-19に関連するアンケート結果を示す。今回のアンケートでは質問１～５についてあてはまる、ややあてはまると回答した学生が多く、全体の80％～98％を示した。コロナウイルスの健康影響について不安に思っている（質問1）についてあてはまると回答した学生全員が、外出するときは必ずマスクをつける（質問3)、外から帰った後は必ず手を洗う（質問4）に対してもあてはまると回答しており､5月時点において３密対策の認識を高く保っていることが示唆された。また、コロナウイルスに伴う政府の自粛要請は妥当だと思っている（質問2）に対してあてはまる、ややあてはまると回答した学生と大学の登校禁止は妥当だと考える（質問5）に対してあてはまる、ややあてはまると回答した学生との間には相関関係 ($r > 0.9$, $P < 0.05$) が認められた。

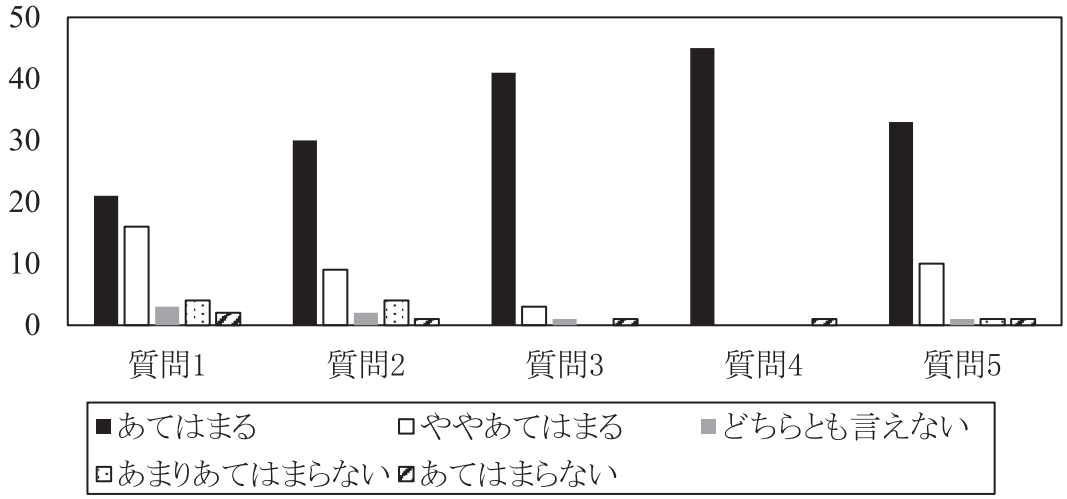

図４ COVID-19 に関連するアンケート結果

（質問 1; コロナウイルスの健康影響について不安に思っている、質問 2 コロナウイルスに伴う政府の自粛要請は妥当だと思っている、質問 3 外出するときは必ずマスクをつける、質問 4 外から帰った後は必ず手を洗う、質問 5 大学の登校禁止は妥当だと考える）

図５に授業前後におけるコロナウイルス感染症への理解の比較を示す。授業前におけるアンケートではマスクをつける理由（質問 2)、手洗いの理由 (質問 3) について理解できていると回答した学生の割合が約 50%（質問 2 22/46、質問 3 24/46）だったのに対して、コロナウイルスの健康影響について知識を得ている（質問 1）と回答した学生の数は約 26%となった。このことは、感染症対策としてのマスク着用や手洗いについてはコロナウイルスの健康影響について知識を得ていなくともインフルエンザウイルス対策といったこれまでに身につけていた習慣的な行為が、マスク着用や手洗いに対する理解を助けていた可能性が考えられる。一方、大学１年生はメディアやインターネットなどを通じた情報入手ではコロナウイルスの健康影響について、自身が十分な知識を得ているとは認識できていない可能性も併せて考えられた。

環境リスクに関する授業の効果について、図５に示す授業前後の理解者数の変動から考察する。今回、質問した３つの項目全てで理解した学生の数が 1.7 ～ 2.2 倍に増加した。授業では、想定される感染経路や、マスクの網目と飛沫のサイズの比較、製品に付着したウイルスの感染力保持期間について定量的な情報を授業で話したためその理解について一定の効果があることが示唆された。

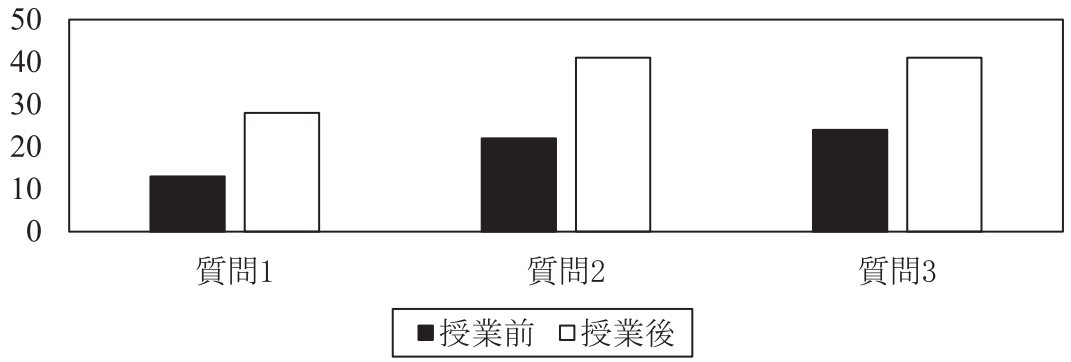

図５ 授業前後におけるコロナウイルス感染症への理解の比較

（質問 1; コロナウイルスの健康影響について知識を得ている、質問 2 マスクをつける理由について理解できている、質問 3 手洗いの理由について理解できている）

2020 年 7 月以降に実験・演習科目など一部の授業が対面可能となりそれに伴い学生が大学に登校するようになった。数か月顔を合わせていないため授業後に談笑する姿も多く見られ学生にとって大学に来るということが授業以外にも様々な役割を担っていることが改めて認識された。通学時間の配慮、授業における３密対策の徹底などある程度リスク管理が可能な項目もある一方、マスク着用を維持することや手洗い、消毒の徹底については個人差があり実験・演習などで物に触れる場合は必ず事前に授業でガイダンスをおこなうことが重要であると考えられた。大学１年生についてはそもそも大学自体になれておらず、友達付き合いの観点からも集団としての行動が増えてくると考えられる。ゼロリスクでない現象に対してどこまでを許容していくのかの指針が明確に認知されるまでは個人のリスク感を高めることは必要でそのための授業の利用は効果があると考える。

謝辞

本調査にご協力いただいた全ての方に感謝致します。

参考文献

1）新型コロナウイルス感染拡大の学生生活への影響調査　https://www.free20180913.com/ 2020 年 11 月 3 日アクセス

2）学生のこころとからだの調査 COVID19 による社会生活の急激な変化が与える大学生のメンタルヘルスへの影響　秋田大学

3）ウイルス除染ガイダンス　日本リスク学会

4）「緊急！大学生・院生向けアンケート」大学生結果速報　全国大学生活協同組合連合会 広報調査部　https://www.univcoop.or.jp/covid19/enquete/pdf/link_pdf01.pdf　2020 年 11 月 3 日アクセス

5）コロナ禍の外出自粛で生活リズム変化　早稲田大学 https://www.waseda.jp/top/news/70080　2020 年 11 月 3 日アクセス

付表１　アンケート項目

コロナウイルスに関する質問（あてはまる、ややあてはまる、どちらとも言えない、あまりあてはまらない、あてはまらない）

コロナウイルスの健康影響について不安に思っている
コロナウイルスに伴う政府の自粛要請は妥当だと思っている
外出するときは必ずマスクをつける
外から帰った後は必ず手を洗っている
大学の登校禁止は妥当だと考える

外出自粛の影響に関する質問（まったくそう思わない、そう思わない、どちらとも言えない、そう思う、強くそう思う）

生活のリズムが崩れた
運動不足になった
オンラインゲームの時間が増えた
家族と会話する時間が増えた
読書や勉強の時間が増えた
社会の動向を新聞やニュースで良くチェックするようになった

現在、大学に行けないことで感じるストレスはありますか（複数可能）
- 大学の講義を教室で受けられない
- サークルやアルバイトなどの課外活動ができない
- 新しい友人ができない
- 生活にめりはりがない
- 家にいて健康が維持できない
- 特にない

現在の外出自粛はあとどのくらい継続できますか。
- １ヵ月
- ２ヵ月
- 半年
- １週間
- 継続できない
- 終息するまで

コロナウイルス感染症への理解に関して質問します　（理解している、理解していない）

・　コロナウイルスの健康影響について知識を得ている
・　マスクをつける理由について理解できている
・　手洗いの理由について理解できている